

Tokyo Amadeus Chorus

*The
10th
Concert*

東京アマデウス合唱団

第10回定期演奏会

1989年11月23日(木)
練馬文化センター大ホール

ごあいさつ



本日は東京アマデウス合唱団第10回定期演奏会にお越しいただき、ありがとうございます。

当合唱団は、年1回の定期演奏会を目標に発足してはや10年、ここに第10回目の演奏会を迎えることができました。

思えば、第1回目の演奏会ではすべて手さぐり。団員の意気込みと熱気で会場をいっぱいにして、モーツァルトのレクイエムを歌いました。それから10年、多くの困難もありましたが、その時々の良い仲間と良い指導者に恵まれ、そして毎年演奏会を聴きに来てくださる多くの方々に励まされて、今日まで歩んで来ることができました。

今回は、同じモーツァルトのレクイエムをより一層、聴いてくださる方々の心に響く音楽性豊かな演奏ができるようにと心がけ、練習を重ねてまいります。少しでも進歩を感じていただければ、嬉しく思います。

今後とも、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

Program

プログラム

W.A.Mozart

モーツァルト

1.

MISSA BREVIS

ミサ ブレヴィスト長調

[K.140]

I.	Kyrie	主よ あわれみたまえ
II.	Gloria	神に栄光あれ
III.	Credo	我は信ず
IV.	Sanctus	聖なるかな
V.	Benedictus	ほむべきかな
VI.	Agnus Dei	神の小羊

2.

REQUIEM

EDITION: F. Beyer

レクイエム ニ短調

[K.626] F・ノヴァイヤー版

I.	INTROITUS, Requiem	入祭文 永遠の安息を
II.	KYRIE	主よあわれみたまえ
III.	SEQUENZ Dies irae Tuba mirum Rex tremendae Recordare Confutatis Lacrimosa	続誦 かの日こそ怒りの日 妙なるラッパ 恐るべき大王よ 慈悲深きイエス 呪われしもの その日こそ涙の日
IV.	OFFERTORIUM Domine Jesu Hostias	奉献文 主イエス・キリスト いけにえ
V.	SANCTUS	聖なるかな
VI.	BENEDICTUS	ほむべきかな
VII.	AGNUS DEI	神の小羊
VIII.	COMMUNIO	聖体拝領誦

解 説

アナ 「みなさん、こんにちは。『みんなのモーツァルト』の時間です。本日はこれから東京アマデウス合唱団の第10回定期演奏会を練馬文化センターより生放送でお送りします。曲目はモーツァルトの声楽作品の中から『ミサ・プレヴィス』(K.140)と『レクイエム』(K.626)です。さて、最初に『ミサ・プレヴィス』ですが。」



解説 「これは問題作です。モーツァルトの作品番号であるK番号の元になったケツヘルによる作品目録では、最初140番でした。ところが、主題の展開や声部進行が“モーツァルトらしく”なく、自筆譜も残っていないなどの理由から、あとで『モーツァルトの作品ではない。これは偽作!』として目録の付録(Anh.C1.12)にまわされてしまったのです。」

アナ 「えっ。では、モーツァルトの作品ではないのですか。」

解説 「まあ、そうあわてないで。面白いことに、このミサはモーツァルトが活着しているうちにヨーロッパに広まっていた曲で、各地の教会に結構写譜が残っているのですね。そのなかのアウグスブルグ《聖十字架教会》の写譜にある書き込みが、最近の研究でモーツァルト直筆と判定されまして、現在では『やはりモーツァルトの真作だった』ということで一応決着をみているのです。作曲年代は1770年代前半頃とされています。モーツァルトは1756年の生まれですから、15~6才の作品ですね。」

アナ 「クロでないものはシロということですか。この手の研究は大変なのでしょうね。」

解説 「この曲は、俗に『パストラール・ミサ』といわれています。この『パストラール』というのは、イエス・キリストの生誕にちなんだ牧歌風の曲で、クリスマスに演奏されます。『ミサ・プレヴィス』全体のトーンとして何となくそんな優しい雰囲気支配的ですね。」

アナ 「本日は合唱団の方に来ていただいています。実際に歌ってみていかがですか。」

アマデウス 「はい、正直言います、『本当にモーツァルトかなあ?』ってところもありますね。二つのパートがずっと同じ旋律を歌っていたり、《アニヌス・ディ》なん

て、同じパターンを繰返して“モーツァルトらしく”ないし、少なくとも他人の手が加わっている可能性はあるのではないのでしょうか。」

解説 「なかなか難しいところですね。他人の作品ということはまずないでしょうが、誰かの手が加わっているという可能性はどうか、といわれると一概に否定もできませんね。」

アナ 「あのサリエリというのは…」

解説 「それは映画の見過ぎですよ。ザルツブルグにいた頃だから名前は知っていても、会っていないでしょう。それだったら、あのハイドンの弟ミハエル・ハイドンの方がまだ可能性はありそうですが。当時はだいふ仲がよかったようで、少年モーツァルトはかなり影響を受けたらしいですからね。」

アナ 「さて、『レクイエム』に話を移しましょう。この曲はモーツァルト最後の曲で、灰色の服を着た見知らぬ男がある日やってきて、誰のためのレクイエム(鎮魂歌)だか告げずに作曲を依頼していった、という不気味な伝説が残っています。」

解説 「他の名曲と同様に、この曲も自分自身から伝説を作り出すような不思議な雰囲気を持っていますね。それはそれでロマンチックですけれども、今までの研究でそういった伝説の大部分は解明されてしまいました。ヴァルゼック伯爵の依頼人というのが、この“灰色の服の男”の正体です。ヴァルゼック伯爵は、この頃若い奥さんを亡くしたばかりでして、他人が作曲したものを自作の『亡き妻に捧げるレクイエム』として披露するために、この不気味な依頼になったのです。伯爵としては、こんな事で後世に名が残ってしまうとは夢にも思っていなかったでしょうね。」

アマデウス 「時期的にはオペラ『魔笛』(K.620)と同じ頃です。楽しいオペラとレクイエム、こんな性格の違う曲が、同時に作られていたなんて信じられませんが。」

解説 「まったくその通り。『魔笛』の初演が1791年9月30日ですから、実際には『レクイエム』はそれから本腰をいれたのだと思います。『レクイエム』の草稿に1792年とがありますから、その頃には完成している予定だったでしょうが、残念なことに未完成のこの曲を残したまま、亡くなってしまいます。1791年12月5日のことでした。」

アマデウス 「2年後には“没後200年”という記念すべき年がやってきますね。」

解説 「ええ。さて、あとに残された妻のコンスタンツェはお金の関係で、完成した『レクイエム』がどうしても必要だったので、いろいろな人に当たったあげく、結局弟子のジュスマイヤーが引き受けて完成したというわけです。これが一般に『ジュスマイヤー版』といわれるもので、いわば通俗版でしょうか。」

アナ 「モーツァルトはどの程度完成していたのですか。」

解説 「程度の差こそあれ間違いなくモーツァルトの手が入っているのは、I. 入祭文(『レクイエム』)とII. (クリエ)、III. 続誦(『ディエス・イレ』から『ラクリモサ』)、IV. 奉献文(『ドミネ・イエス』と『ホスティアス』)だけといわれています。ただ、『ラクリモサ』は8小節までですが。」

アマテウス 「『ここで作曲者は死亡した。』というわけですか。」

解説 「ええ、その言葉はバッハの『フーガの技法』の話でしたね。そういえば、その言葉の前に『B-A-C-Hの主題を導入したとき』というくだりがありますが、この『レクイエム』も、『ラクリモサ』の7小節2拍目からの合唱部のベースパートにB-A-C-Hの音列がでできます。偶然とは思えないのですが、不思議な話でしょう。」

アナ 「そうですね。」

解説 「話が横道にそれましたが、ジュスマイヤーの創作部分について、もっと“モーツァルトらしく”できるのではないかとということで、170年後の1972年にドイツのフランツ・バイヤーという人がオーケストレーションを大幅に変更した版を出版しました。これが今日演奏される『バイヤー版』です。さらにその後、イギリスのリチャード・モーンスターという人が、ジュスマイヤーの創作と思われる部分をおもいっきりカットして、過激にも自分で作曲までした『レクイエム』を発表しました。これが『モーンスター版』で、出版されたのは1988年と、ごく最近のことです。彼が作ったのは、『ラクリモサ』の9小節以降とそのあとに続く『アーメン』です。あっ、それから『サンクトゥス』と『ベネディクトゥス』をカットしています。」

アマテウス 「ちょっとやり過ぎじゃないかなあ。この『モーンスター版』を使った唯一のCDを出しているホグウッドは『モーンスター版が絶対というわけではなくて、従来の演奏に対する問題提起だ。』と言っていました。そういう意味では面白い試みではありますが…」

解説 「さて、今日演奏される『バイヤー版』は『ジュスマイヤー版』の構成を踏襲してしまっていて、オーケストレーションの大幅変更が主眼になっています。合唱部については、内声部(アルトとテノール)の変更が中心ですが、それほど変わっていません。従来の『ジュスマイヤー版』で

は、楽器と合唱の重なりが多く、重い印象を与えていますので、そこらへんがだいぶ改善されました。」

アマテウス 「実際歌ってみて、『ジュスマイヤー版』だと、なんかこう、重苦しいだけで『疾走』できないなっていう感じがありましたけれど、『バイヤー版』は、そこらへんの感覚がだいぶでてきて軽くなっています。」

解説 「そうですね。やはりモーツァルトの音楽は“疾走”していないと面白くありません。『レクイエム』が“重い”という話ですが、続誦部のテキスト(『ディエス・イレ』から『ラクリモサ』まで)というのは中世のベストの恐怖の反映であるという説があるんですけど、作曲中にモーツァルトが死んでしまったおかげで、結局この部分が曲の核になってしまったわけです。つまり、いたずらに恐怖をあおって、いざ“疾走”しようとしたら、死んじゃったわけで、異様に暗くて重い曲ができてしまった、ということじゃあないかと思うのですが。そういう意味では、バイヤーの訂正というのは、原型はとどめておいて、その範囲内で『疾走』できる曲にしたという点で、画期的なわけですね。」

アナ 「今では『バイヤー版』が次第に主流を成しつつあるのですか。」



解説 「そこまで言い切っていいかどうかは難しいところですが、録音にしろ演奏会にしろ、増えているのは事実ですね。」

アマテウス 「そろそろ、本番がありますので、これで。」

解説 「頑張ってくださいね。『ミサ・プレヴィス』にしろ、『レクイエム』にしろ、モーツァルトらしからぬ要素を多分に含んでいながらモーツァルトの作品とされている曲だと思います。2曲とも一筋縄ではいかない由来を持っていますので、そこらへんをどのように表現するか、今日の聴きどころでしょうね。」

アナ 「そうですね。ではこのへんで演奏にうつりましょうか。ごゆっくりお聴き下さい。」

Profile

指揮 斎藤 明夫

CONDUCTOR
Akio Saito



東京芸術大学卒業、同大学院修了。R.フィッシャー、P.H.フッテンロツハ一、池宮英才、岳藤豪希、小林道夫の各氏に師事。「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」「口短調ミサ」「メサイヤ」「第九」、芸大定期「ドイツレクイエム」等のソリストを務める。バッハアカデミー東京にてH.リリング氏より高評を得る。現在、東京バッハアカデミー講師、芸大バッハカンタータクラブ演奏委員長、ヴォイス・ラボ所属。1987年11月より当合唱団の指導にあたっている。

ソプラノ 大谷しほ子

SOPRANO
Shihoko Otani



東京芸術大学卒業。'84~'87年ドイツ留学。発声を三井ツヤ子、バロック歌唱法をB.シュリックの各氏に師事。その傍らヘルムート・リリング率いるゲヒンガー・カンタライの主力メンバーとして世界的な演奏活動に参加。バロック古典音楽から現代音楽に至る広範なレパートリーをもち、活発なソロ活動を行っている。現在、東京混声合唱団員。

アルト 菅 有実子

ALTO
Yumiko Kan



東京芸術大学卒業、同大学院修了。日原美智子、毛利準の両氏に師事。NHK新人オーディション合格。第3回川崎音楽賞コンクール第1位。芸大定期「カンタータ147番」、バッハ「クリスマスオラトリオ」「口短調ミサ」「マタイ受難曲」、モーツァルト「ヴェスペレ」、ハイドン「テレジアミサ」などのソリストを務める。現在、東京都立芸術高校講師。

テノール 片野 耕喜

TENOR
Koki Katano



東京学芸大学在学中。飴屋善敏、遠藤優子、高橋修一、有村祐輔の各氏に師事。モーツァルト「戴冠ミサ」「レクイエム」「ヴェスペレ」、バッハ「カンタータ106番」のソリスト、また「ヨハネ受難曲」の福音史家を務める。第1回栃木「蔵の街」音楽祭に参加。

バス 野本 立人

BASS
Tatsuhito Nomoto



東京芸術大学卒業。伊藤巨行、原田茂生、羽根功二の各氏に師事。芸大メサイヤのソリストに選抜。芸大バッハカンタータクラブにて小林道夫氏の指導のもと多数のカンタータ演奏に出演。モーツァルトのミサ曲、「第九」などに出演する傍ら、ヴォーカルアンサンブル『トリレンコ』にて現代音楽を、また合唱指揮者としても活躍。

オルガン 水野 克彦

ORGEL
Katsuhiko Mizuno



東京芸術大学卒業。ピアノを滝崎鎮代子、クラリネットを千葉国夫、室内楽を細野孝興、オルガンは今井奈緒子の各氏に師事。芸大九十周年記念演奏会に出演。在学中芸大バッハカンタータクラブにてバッハの作品に親しみ小林道夫氏の薫陶を受ける。現在はピアノ伴奏、オルガン、通奏低音の他、合唱指導、作曲と幅広く活躍。1987年11月より当合唱団のピアノ伴奏を務めている。

管弦楽 東京アマデウス管弦楽団

ORCHESTRA
Amadeus Orchester, Tokio

1973年、指揮者玉置勝彦氏の門下生とその友人達により結成された。東京大学管弦楽団の卒業生を中心に構成。定期演奏会は既に34回を数える。モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、メンデルスゾーン等をはじめ、最近ではブルックナー、マーラー、リヒャルト・シュトラウス等大編成の演奏も行う。その他子供のためのコンサート、地方での夏のコンサートなど。

合唱 東京アマデウス合唱団

CHORUS
Tokyo Amadeus Chorus



モーツァルト・レクイエム

1981年2月、東京の石橋メモリアルホールで行われた第1回定期演奏会で東京アマデウス合唱団は産声をあげました。メインプログラムはモーツァルト・レクイエム。以後第5回、そして10回目の今回と、節目の演奏会にはこの曲を演奏する“伝統”を守り今日に至っています。当合唱団設立の原点とも言える曲が本日演奏するモーツァルト・レクイエムなのです。



アマデウス

モーツァルトのクリスチャンネームにして“神の愛でし人”の意味を持つ“アマデウス”は、“自分たちが歌いたい教会音楽を自由に歌おう”という設立時のメンバーの合唱団に対する理念にぴったりのネーミングであったと言えます。

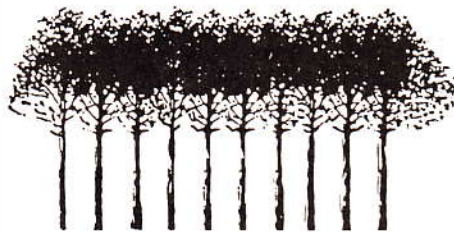
“アマデウス”は設立当時、一般にはあまりなじみのあるボキャブラリーではなく、“アマテラス”“アマゾネス”などと揶揄されたこともありましたが、同名の映画のヒットですっかりポピュラーになったことはご高承のとおりです。



スコットホール

東京アマデウス合唱団の練習会場は“早稲田奉仕園・スコットホール”。この建物は1921年に建てられた北米様式の煉瓦建ての建物で、高い天井を持つすばらしい音響のホールです。しかも都心近くにありながら都会の喧騒とは無縁の静かな環境に囲まれ、雑事を忘れて練習に集中できる得難い空間です。このホールのムードが当合唱団の雰囲気を決定づけていると言っても過言ではありません。毎週水曜日、学生・社会人・主婦とバラエティに富んだメンバーが集まり練習を行っています。早稲田の学生街にも近いことから練習後に一杯やる場所にも事欠きません。——あなたも一度練習をのぞいてみませんか。

ソプラノ	大久保ルミ子 小林 真子 牧野 玲子	大庭登美代 鈴木奈々子 三浦 怜子	大山 博子 鈴木 真澄 山本 幾子	金谷美智子 須藤佳代子 吉田えみ子	狩野 直子 永瀬 久子 吉野みどり	窪田 玲子 禰宜田亜希子	蔵並 雅美 張替いわね
アルト	伊藤 正子 重泉 秀子	井上やす子 辻村 順子	大岩 幸子 長谷川敦子	梶 玲子 平野 玲子	加藤美穂子 前田 朝子	川島 淳子 宮崎 米子	酒井 幸子 山崎 孝子
テノール	伊原 宏	加生 信広	片岡 繁	中屋 哲夫	古沢 忠久	吉田 一郎	橋本 克久
バス	落合 良式 林 次郎	佐久間雄二 山下 敬之	竹内 智之	中馬 充	根本 剛	野口 碩	



1981 February **Mozart: REQUIEM**
1981 November **Handel: MESSIAH**
1982 November **Fauré :REQUIEM**
1983 September **Mozart: KRONUNGS MESSE**
1984 September **Mozart: REQUIEM**
1985 October **Bach :KANTATE Nr.106**
1986 October **Mozart: GROSSE MESSE**
1987 October **Schütz :MUSIKALISCHE EXEQUIEN**
1988 December **Mozart: VESPERAE**
1989 November **Mozart: REQUIEM**